C—72　日本在来機織具の調査研究（第2報）
——高機の形式的分類とその諸問題——

愛泉女短大　　角山　幸洋

1.　第1報のいざり機調査に対し，本報告では，高機の形式・使用形態などの諸問題について，現存する高機を中心に検討を加え，生産手段としての高機が織物生産にどのように対応したかを問題とする。

2.　民俗学的調査を主体とし，博物館・個人コレクション，機業場などに保存または現用する高機について，形式・構造・部品の名称などを調査し，実測図を作成し

た。また歴史的資料(絵画関係資料・文献)についても，高機関係について調査したことはいうまでもない。

3.　調査の結果，高機は絹高機，木綿高機に大別することができ，木綿高機は，長機系と半機系にわけられ，さらに長機系は近畿A・B・C型，東海型，瀬戸内型，山陰型などに分類され，産地事情により半機化したものがある。高機の形式は，基本的に絹高機が存在していたが，比較的生産が制約されていたため，形式変遷が停滞的であった。それに対し，木綿は河内・大和地方の斜行的形態をとるものが基本的形態であり，これが各地へ急速に伝播し，地域性をもつ形式を生じ，また半機化したこともある。そして繊維自体の特性により機台を異にしていたものが，不差別に機掛けされるように一般化する。しかし高機の全国的普及は地域的に格差があり，バッタン装置付属のものが明治中期以後から，いざり機から高機へと転換したものが多く，停滞的な地域では現在でもいざり機を使用する。